劉辰翁の評點と「情」

奥野新太郎

一　はじめに

劉辰翁（一二三二～九七）は、字は會孟、號は須溪、江西廬陵（現在の江西省吉安縣梅塘鄉）の人である。彼は自身の著作[1]に加え、唐宋の詩を中心に大量の評點を殘したことでその名が知られる。評點とは、詩文の本文の傍らに圈點と呼ばれる記號を付し、さらに評語（批語）を付すという、文學批評の一形態である[2]。劉辰翁の評點は、それが出現した元代において既に高い評價を得た。例えば揭傒斯（一二七四～一三四四）は次のように述べる。

清寧、廬陵人也、姑以廬陵言之、歐公、天下之望也、百世之師也、宜以爲歸。須溪、衰世之作也、然其評詩、數百年之閒一人而已、獨非子之師乎。因二公之盛、浚六經之源、益溯而求之、海內之名、必歸子矣。（「吳清寧文集序[3]」）

清寧、廬陵の人なれば、姑く廬陵を以て之れに言ふに、歐公（歐陽脩）、天下の望なり、百世の師なり、宜しく以て歸と爲すべし。須溪、衰世の作なり、然れども其の詩を評するや、數百年の閒に一人あるのみなれば、獨り子の師に非ざらんや。二公の盛んなるに因りて、六經の源を浚ひ、益す溯りて之れを求むれば、海內の名、必ずや子に歸さん。

ここで揭傒斯は、劉辰翁について、數百年に一人の逸材であると絶賛する。また元の大儒吳澄（一二四九～一三三三）も、

近年廬陵劉會孟、於諸家詩、融液貫徹、評論造極。吾鄉甘中夫、少而專攻、老乃奇絕、自成一家。若二君之於詩、庶乎其可也。（「大酉山白雲集序[4]」）

近年廬陵の劉會孟、諸家の詩に於て、融液貫徹し、評論は極まるに造る。吾が鄉の甘中夫（甘泳）、少くして專ら攻め、老いては乃ち奇絕にして、自ら一家を成す。二君の詩に於けるが若きは、其の可なるに庶し。

と述べ、やはり劉辰翁の評點について賞贊する。彼の評點がかくも高く評價されたのは、作品中に込められた「情」を重視するという劉辰翁の文學觀に大きな要因があった[5]。ここで言う「情」とは、作品中の詩句や文字の背景にある作者自身の様々な感情や思い、或いは作中人物のそれを指す。劉辰翁は、時には詩中のたった一文字について、作者がその字を用いた意圖や、その字に込められた作者の心情について

深く分析を加える。[6]「情」は、劉辰翁が作品を解釋する際に何よりも重視したものであった。

詩における「情」の重視は、元代に特に盛んに主張された文學觀である。[7]それは、やがて唐詩の抒情性への回歸として論じられる元詩の特徴とも繋がる重要な文學觀であり、然らば、宋末元初という時代に、劉辰翁がその著作や評點を通して「情」の重視を主張したという事實は、注意されてよいであろう。「情」を重視するという劉辰翁の文學觀は、宋の文學から元の文學への移り變わりにおいて重要な役割を擔ったものとして、元詩全體において重要な意味を持つのである。そこで本稿では、「情」の重視を中心に、劉辰翁の評點の實例を詳細に分析し、その文學史上の意義について論じたい。

二　「情」を重視する劉辰翁の文學觀

劉辰翁の文學觀において最も重要なのは、作品中に込められた「情」を重視するという姿勢である。このことは劉辰翁自身の發言からも確認できる。例えば「歐氏甥植詩序」[8]には次のように見える。

詩無改法、生於其心、出於其口、如童謠、如天籟、歌哭一耳。[9]雖極疎戇朴野、至理礙詞褻、而識者常有以得其情焉。……荊軻、項羽臨岐決絶之辭、出於不擇。「大風」之歌、一發有英氣、比「秋風」視草遠矣。彼旬煅月煉、豈復有當日興趣萬一哉。因歐氏甥喜改詩、往往不如前、爲言吾私未可以改罷長吟[10]語害意也。

詩に改むるの法無し、其の心に生じ、其の口より出づるは、童謠の如く、天籟の如く、歌哭一なるのみ。疎戇にして朴野たるを極め、理は礙げられ詞は褻なるに至ると雖も、識者は常に以て其の情を得る有り。……荊軻、項羽の臨岐決絶の辭は、不擇より出づ。「大風」の歌は、一たび發して英氣有り、「秋風」の草を視せるに比ぶれば遠し。彼は旬に煅へ月に煉れば、豈に復た當日の興趣の萬一も有らんや。歐氏の甥 詩を改むるを喜ぶも、往往にして前に如かざるに因りて、爲に言ふ 吾私（ひそ）かに未だ改め罷みて長吟するの語を以て意を害するを可とせざるなりと。

この文章で、劉辰翁は次のように言う。詩に推敲の法は無く、心に生じ、口から發せられた言葉は、例えば童謠や天籟のように、悲喜の感情が渾然一體となって、たとえその文辭が非常に未熟で粗野であり、道理の通じない部分が有り、言葉も品の無いものであったとしても、識者は必ずそこに「情」を讀み取るのである。荊軻や項羽が死地に臨んで歌い上げた言葉には文飾など微塵も無い。漢の高祖が一氣に歌い上げた「大風歌」が見事な勇ましさを帶びるのは、武帝の「秋風辭」が配下の文人の文飾を經ているのとは比べようも無い。推敲を加えれば加えるだけ、最初に發せられた時の興趣は失われてしまう。そして、杜甫が「新詩改め罷みて自（みづか）ら長吟す」と言ったのを引き合いに出し、推敲によって却って作品の內容を損なってしまってはならないと劉辰翁は主張する。

このように、推敲を重ねない、作爲的でない言葉は、劉辰翁が非常に重んじる所であった。[11]何故なら、最初に發せられたままの言葉にこそ最も強い「情」があると劉辰翁は考えるからである。

『詩』自小夫賤隸興寄深厚、後來作者必不能及。『左傳』『史』『漢』閒記人語言、亦不特公卿世家爲有典刑。雖何物老人、至鄙俗不可口者、倉卒問對、可誦而擧。（「曾季章家集序」[12]）

『詩』は自（おのづか）ら小夫賤隸の興寄すること深厚なれば、後來の作る者は必ず及ぶ能はず。『左傳』『史（記）』『漢（書）』の閒（ま）ま人の語

言を記するは、亦た特だ公卿世家のみ典刑有りと爲さず。何物の老人の、至だ鄙俗にして口にすべからざる者、倉卒の問對と雖も、誦して擧ぐべきなり。

この文章で、劉辰翁は次のように述べる。『詩經』の詩には古代の庶民の感情が強く込められており、後世の作り手の及ぶ所ではない。また、『左傳』『史記』『漢書』には當時の人々の會話が記されているが、公卿や世家のそれを手本にするばかりではなく、どこぞの老人の鄙俗な言葉であっても、或いは咄嗟の問答であっても、口ずさんで味わうに足りるのである、と。

ここにも、修辭や措辭の巧拙よりも、詩文の中に込められた思いの強さを重視する、劉辰翁の文學觀が示されている。

劉辰翁にとって、詩は人間の感情のほとばしりであった。

凡天之所不平者、皆人事之激也。大決所犯、傷人必多、不如小決使道[13]。人之不平所不至於如天者、其小決者道也。小決之道、其惟詩乎。故凡歌行曲引、大篇小章、皆所以自鳴其不平也。而其險哀有甚於雷風星變、山海潮汐者矣。（「不平鳴詩序[14]」）

凡そ天の平らかならざる所の者は、皆な人事の激するなり。大決して犯す所、人を傷つくること必ず多ければ、小決して道かしむるに如かず。人の不平の天の如きに至らざる所の者は、其れ小決する者の道けばなり。小決の道くは、其れ惟だ詩のみか。故に凡そ歌行曲引、大篇小章の、皆な自ら其の不平を鳴らす所以なり。而して其の險哀なること雷風星變、山海潮汐より甚だしき有り。

この文章は、詩に對する劉辰翁の考え方を探る上で非常に興味深いものである。まず省略した前半部分[15]では、天は不平を溜め込むが、それを言葉で訴える手段を持たず、その極限まで溜まった不平は烈風や迅雷等の自然現象として現出する。これらは天が蓄積した怒りであり、それが發散されないからこのようなことが起こるのだ、と述べた後、引用部分に續く。劉辰翁によれば、天の不平というのは人間の不平が天に蓄積されたものであり、それは一度に放出されれば必ず人を傷つける。故に決壞する前に小出しに放出させるべきであり、放出させる手段としては詩が最も相應しいのだという。

この論は韓愈の「不平則鳴」の說を下敷きにしている。この文に見える、人間の中に溜まった不平不滿を外へと吐き出す手段として、詩が最も相應しいとする考えは、詩は感情の發露に他ならないという劉辰翁の文學觀を示すものであろう。すなわち劉辰翁にとって、詩とは人間の內なる思いや感情が放出されたものであり、故に、詩を讀む際には何よりもそれを讀み取らねばならぬのである。

これらの發言から、劉辰翁が如何に文學において「情」というものを重視していたかは明らかであろう。そして、この文學觀は彼の評點中においても認められる。例えば劉辰翁の息子劉將孫（一二五七～一三二〇？）は、次のような父の言葉を記錄する。

第每見擧長吉詩敎學者謂、「其思深情濃、故語適稱。而非刻畫無情無思之辭、徒苦心出之者。若得其趣、動天地、泣鬼神者、固如此。」又嘗謂、「吾作『興觀集』、最可以發越動悟者、在長吉詩。」（「刻長吉詩序[16]」）

第だ每に見るに長吉詩を擧げて學ぶ者に敎へて謂はく、「其の思ひ深く情濃やかなれば、故に語は適稱なり。而して無情無思の辭を刻畫し、徒らに心を苦しめて之れを出す者に非ず。其の趣を得て、天地を動かし、鬼神を泣かしむる者の若きは、固より此くの如し」と。又た嘗て謂はく、「吾『興觀集』を作るに、最も以て

發越動悟すべき者は、長吉詩に在り」と。

これは中唐の詩人李賀（字長吉）の詩を評した言葉である。劉辰翁は李賀詩集に評點を施し[17]、また「最可以發越動悟者、在長吉詩」と述べるほどに李賀詩を愛好していた。彼の「情」の重視が最も顯著に發露したのは、李賀詩においてであった。今日廣く認識されている李賀詩の抒情性を初めて明確に指摘したのは劉辰翁であり、李賀詩は劉辰翁によって讀み直され、新たな評價を得たのである。以上のことを踏まえ、次節以降では劉辰翁の評點の實例を擧げ、詳細に分析していく。

三　劉辰翁の評點について

①「情」の重視

まず次の詩を見てみたい。宮中にて寵愛を受けられない宮女が、宮中より解放されて故郷へ歸りたいと切望する、李賀の「宮娃歌[18]」である（以下、詩の傍點は劉辰翁の圈點、【　】内は評語）。

蠟光高懸照紗空　　蠟光　高く懸かり　紗を照らして空し
花房夜擣紅守宮　　花房　夜擣く　紅守宮
象口吹香毼氀暖　　象口　香を吹き　毼氀暖かく
七星挂城聞漏板　　七星　城に挂かり　漏板を聞く
寒入罘罳殿影昏　　寒は罘罳に入りて　殿影昏く
彩鸞簾額着霜痕　　彩鸞の簾額　霜痕着く
啼蛄弔月鈎欄下　　啼蛄　月を弔ふ　鈎欄の下
屈膝銅鋪鏁阿甄　　屈膝　銅鋪　阿甄を鏁ざす

【兩語極是憔悴（兩語〔前二句〕極めて是れ憔悴なり）。】

夢入家門上沙渚　　夢に家門に入りて沙渚に上れば
天河落處長洲路　　天河の落つる處　長洲の路

願君光明如太陽　　願はくは　君が光明　太陽の如くして
放妾騎魚撇波去　　妾を放ち　魚に騎り　波を撇つて去らしめんことを

【意到語盡、無復餘怨矣。哀怨竭盡。麗語猶可及、深情難自道也（意は到り語は盡き、復た餘怨無し。哀怨は竭盡す。麗語は猶ほ及ぶべくも、深情は自ら道ひ難し）。】

この詩の總評で劉辰翁は、「意は充分に述べつくされ、言葉も不足が無く、その怨みの念も餘す所無く詩中に込められている。その哀しみや怨みはまさにここに盡きている。表現上の華麗さは匹敵することはできても、深い情は容易に詠い得るものではない」と述べる。宮女の悲しみを餘す所無く見事に詠い上げているという評價は、この詩の全ての字に圈點が付されていることにも示されている[19]。そして、劉辰翁はこの詩に「深情」を讀み取っているのだが、この「深情」とは具體的には如何なるものだろうか。この詩は八句目までは、三人稱の視點による情景描寫によって占められる。宮女に貞操を強いる紅守宮[20]を手ずから擣く姿、暖かい部屋に窗から侵入してくる寒さ、窗の向こうに暗くたたずむ宮殿の影、月を弔うかの如き悲しげな蟲の聲等、宮女の悲しみを象徵的に描き出しており、典型的な宮怨詩と言ってよい。劉評に言う「麗語」とは、この部分に對するものであろう。ここまでならば、麗語を連ねた一般の宮怨詩とさほど變わらない。だが、この詩は末四句で不意の轉換を見せる。三人稱の展開から一轉して、宮女の悲痛な叫びが四句にわたって展開されるのである。ここに劉辰翁は、宮女の深い悲しみ、すなわち「深情」を見たのであろう。李賀詩の特徵として、作中の人物の聲をあたかも自分の聲のように、巧みに拾い上げて詩中に詠み込むというものがあるが[21]、まさに「思深情濃」なる

が故の特徴と言えよう。

では、次の詩はどうであろうか。李賀の「示弟」[22]である。

別弟三年後　弟と別れてより三年後
還家一日餘　家に還りてより一日餘
醁醽今夕酒　醁醽　今夕の酒
細帙去時書　細帙　去りし時の書
病骨猶能在　病骨　猶ほ能く在り
人間底事無　人間　底事か無からん

【亦是恨意。淒婉如老人語（亦た是れ恨意なり。淒婉として老人の語の如し）。】

何須問牛馬　何ぞ須ゐん　牛馬を問ふを
拋擲任梟盧　拋擲して梟盧に任さん

これは、諱事件[23]によって榮達の道を閉ざされ、失意の中に歸鄉した李賀が弟へと寄せた詩である。この詩の五、六句目の、「この病身が生きながらえようとは、世の中何が起こるかわかったものではない」という表現に對し、劉辰翁は「（ここに込められているのは）恨意である。その希望を斷たれた哀しげな様子はまるで老人の言葉のようだ」と評する。人生の望みを絶たれた若い詩人の詩句に、若者の言葉とは思えぬほどに憔悴した口吻を感じ取った、興味深い指摘と言えよう。詩中に漂う詩人の絶望を、劉辰翁はかくも敏感に讀み取っている。

また、詩と「情」に關して、劉辰翁に次のような言葉がある。

「王者之迹熄而詩亡」[24]、詩未嘗亡也、而所以爲詩者亡矣。方其甚也、顯譏默刺、無往而非怨。人見其怨也、以爲甚也、不知所以爲厚也、猶有望也。蓋至於奄奄延延、其可譏也以爲不足譏、其可刺也以爲無足刺、則昔之怨者日遠日忘、雖欲求其復甚焉而不可得、而所以爲詩者亡矣。所以爲詩者亡、則其熄久矣。……詩未嘗亡也。而至此無可爲者矣、雖謂之亡可也。科擧廢、士無一人不爲詩。於是廢科擧十二年矣、而詩愈昌。前之亡、後之昌也。士無不爲詩矣。所以爲詩亦有同者乎。（「程楚翁詩序」[25]）

「王者の迹熄みて詩亡ぶ」といふも、詩は未だ嘗て亡びざるなり、而れども詩爲る所以の者亡ぶなり。方に其の甚だしきや、顯譏默刺し、往きて怨むに非ざる無し。人 其の怨を見るや、以て甚だしきと爲すも、厚きを爲す所以を知らざるは、猶ほ望み有り。蓋し奄奄延延たるに至りては、其の譏るべきも也た以て譏るに足らざると爲し、其の刺るべきも也た以て刺るに足る無しと爲せば、則ち昔の怨は日に遠ざかり日に忘られ、其の復た甚だしからんことを求めんと欲すと雖も得べからず、而して詩爲る所以の者亡びたり。詩爲る所以の者亡べば、則ち其れ熄むこと久しきなり。……詩は未だ嘗て亡びざるなり。而れども此の爲るべき者無きに至れば、之れを亡ぶと謂ふと雖も可なり。科擧廢さるるも、士の一人として詩を爲らざるもの無し。是に於て科擧を廢すること十二年、而れども詩愈よ昌んなり。前の亡は、後の昌なり。士の詩を爲らざるは無し。詩爲る所以も亦た同じき者有るか。

この文章は「王者の迹熄みて詩亡ぶ」という『孟子』の有名な句から書き起こされる。そして劉辰翁は、「詩亡」とは詩が亡ぶのではなく、「所以爲詩者」が亡ぶのだと言う。この「所以爲詩者」という言葉は重要である。文中では「怨」で以て代表されるが、これはつまり、詩に込められた強い思いや深い感情、すなわち「情」を指すのであろう。やがて時が經つとともに、人々は詩に深い感情を込めることを忘れ、さらには込められた感情を詩中に感じ取ることもできなくなり、

もはや昔の詩の有り様を取り戻すことはできなくなってしまった。「所以爲詩者」が亡びたのである。そして、詩そのものは決して亡びたわけではないけれども、眞實の詩を作る者がいなくなれば、それは「詩亡」と言わざるを得ない。科擧が停止されたにも關わらず、士人達の作詩に打ち込むことといよいよ盛んであるが、「所以爲詩者」も同じように復活するだろうか、と劉辰翁は憂慮する。ここに見えるのは、近年の作詩熱に對する劉辰翁の鋭い觀察である。すなわち、いかに作詩熱が勃興しようとも、果してそこで作られる詩に詩の本質たる「情」の支えはあるのか、と。

この文章は、劉辰翁が詩の本質について述べた注目すべきものである。詩において最も重要なのは「所以爲詩者」であり、それを失ってはもはやそれは眞の詩とは言えない。この主張は、劉辰翁が詩において、「所以爲詩者」すなわち「情」を何よりも重視していたことを示すものとして解することができる。先に「不平鳴詩序」で見たように、劉辰翁は、詩というものを、人間の内に蓄積された思いや感情のほとばしり出たものと考えていた。劉辰翁にとって、「情」とは詩を讀む上でかくも重要なものであった。

② 不必可解

劉辰翁の評點における「情」の重視を考える上で極めて注目すべきものに、「不必可解」という評語がある。この評語は、劉辰翁の評點の特色を示す重要な語である。例えば次の詩を見てみよう。李賀の「浩歌」[26]である。

南風吹山作平地　南風　山を吹きて平地と作し
帝遣天吳移海水　帝　天吳をして海水を移さしむ
王母桃花千遍紅　王母の桃花　千遍　紅なり
彭祖巫咸幾回死　彭祖　巫咸　幾回か死す
青毛驄馬參差錢　青毛の驄馬　參差たる錢
嬌春楊柳含細煙　嬌春　楊柳　細煙を含む
箏人勸我金屈巵　箏人　我に勸む　金屈巵
神血未凝身問誰　神血　未だ凝らず　身は問ふ誰ぞ
不須浪飲丁都護　浪飲するを須ゐず　丁都護

【李白有「丁都護歌」云、「一唱都護歌、心摧淚如雨」（李白に「丁都護歌」有りて云ふ、「一たび都護歌を唱へば、心摧けて淚雨の如し」と）。】

世上英雄本無主　世上の英雄　本より主無し

【跌蕩愁人（跌蕩として人を愁へしむ）。】

買絲繡作平原君　絲を買ひて繡して作らん　平原君
有酒唯澆趙州土　酒有らば　唯だ澆がん　趙州の土

【「世上英雄本無主」、傑特名言。繡作酒澆、肝肺激烈（「世上英雄本無主」、傑特たる名言なり。繡作して酒澆ぐは、肝肺激烈なり）。】

漏催水咽玉蟾蜍　漏　催し　水　咽ぶ　玉蟾蜍
衞娘髮薄不勝梳　衞娘　髮薄く　梳るに勝へず

【亦不知何從至此（亦た何より此に至るかを知らず）。】

看見秋眉換新綠　看見す　秋眉　新綠に換はるを
二十男兒那刺促　二十の男兒　那ぞ刺促たる

【從「南風」起一句、便不可及。迭蕩宛轉、沈着起伏、眞俠少年之度、忽顧美人。情境俱至、妙處不必可解（「南風」より一句を起こすは、便ち及ぶべからず。迭蕩宛轉として、沈

着起伏するは、眞に俠たる少年の度にして、忽ち美人を顧みるなり。情と境と俱に至れば、妙處 必ずしも解すべからず)。】

この詩の總評で劉辰翁は、「作品に詠われた感情や描かれた境地がともに（この詩ほどに）達していれば、その妙なる所は必ずしも解さずともよい」と言う。「浩歌」は一讀して明らかなように、非常に場面の展開が目まぐるしい作品である。劉辰翁も、十三、十四句目の評語で、「どうしてこのような句が續くのかわからない」と思わずこぼしている。從來の注家も、この展開を合理的に說明しようと苦心してきた[27]。だが劉辰翁は、評語で「まことに勇ましい若者の心持ちだ」と言い、合理的な解釋を求めず、むしろそこに、詩人の若さ溢れる心意氣、或いは口吻を讀み取っている。かかる讀みに基づいた上で、劉辰翁は「情境俱至」と評したのであろう。そして、そのように讀んでゆけば、「不必可解」つまり、この詩の妙も敢えて解そうとせずとも自ずと會得できようと言うのである。

次に、李賀の「後園鑿井歌[28]」詩を見てみよう。

井上轆轤牀上轉　井上の轆轤　牀上に轉ず
水聲繁　水聲　繁く
絃聲淺　絃聲　淺し
情若何　情　若何
荀奉倩　荀奉倩
城頭日　城頭の日
長向城頭住　長く城頭に住り
一日作千年　一日　千年と作せ
不須流下去　須ゐず　流下し去るを

【極似古意。鑿井淺事、獨因轆轤、涉及情事、頗欲係日。如此往來、既託之謳體。長吉短語、自不必一一可曉（極めて古意に似る。井を鑿つことは淺事なるも、獨り轆轤に因りて、情事に涉及し、頗る日を係けんと欲す。此くの如き往來、既に之れを謳體に託す。長吉の短語、自ら必ずしも一一に曉るべからず)。】

夫婦の情愛を詠い上げたこの詩において、劉辰翁は總評で、「李賀の短篇は、その意味を逐一明確に理解せずともよい」と言う。詩句の意味を詳細に解釋しながら讀むのではなく、詩の大意、そして、そこに見える「情事」、すなわち男女の情を解すれば、充分なのである。

これらの詩に見える「理解せずともよい」という劉辰翁の評語は、詩は言葉の意味を逐一解釋して讀むのではなく、詩に込められた感情、或いは詩に漂う詩的情緒を感じ取り、味わえばよいのだという、まさに、「歐氏甥植詩序」において「雖極疎戇朴野、至理礙詞褻、而識者常有以得其情焉」と述べた、彼の文學觀が言わしめた言葉であると言える。

また「貴公子夜闌曲[29]」には次のような評語が見える。

裊裊沈水煙　裊裊として 沈水 煙り
烏啼夜闌景　烏啼く 夜闌の景
曲沼芙蓉波　曲沼 芙蓉の波
腰圍白玉冷[30]　腰圍 白玉 冷たし

【此「貴公子夜闌曲」也。以玉帶爲冷、其怯可見也。語不必可解、而得之心自洒然、迹似亦偏得之形容夜色也（此「貴公子夜闌曲」なり。玉帶を以て冷たしと爲すは、其の怯見るべし。語は必ずしも解すべからず、而れども之れを心に得れば自ら洒然として、迹は亦た偏へに之れを夜色を形容するに

得たるが似し）。】

この詩の評語にも、「語句は必ずしも明確に解釋せずともよい」と述べ、續けて、「（解釋するのではなく）その詩に込められたもの、すなわち貴公子の「怯」たる感情を心得できれば、心は自ずと明らかであり、その心情は、もっぱら詩中の夜の景色を描寫する中から感じ取れるであろう」と言う。語の意味を逐一解釋するのではなく、心で感じ取れ、と劉辰翁は言う。かかる劉辰翁の批評は、作品中の「情」を何よりも重視するという彼の文學觀から生じたものと言えよう。

宋代の詩學における、作者の本來の意圖を求める「尚意」から、その詩の詩としての美學的な性質、すなわち味わいを求める「尚味」の文學觀への變遷において、劉辰翁の評點は後者を代表するものとして位置付けられている。[31] だが、作者或いは作品中の「情」をひたすら讀み取ろうとする劉辰翁の態度は、次節で論じる「作者との同化」とも併せて考えると、詳細な語釋を通して詩人の意を理解しようとする「尚意」の解釋學とは道筋こそ違えども、やはり詩人の「意」に迫ろうとしたものと考えてよい。「情」を讀み取るということは、作者が作品中に込めた様々な思いを汲み取ることに他ならないからである。このことは、作品の解釋ではなく鑑賞に重きを置いたものとして捉えられることの多い劉辰翁の評點において、從來あまり注意されていない。この點で言えば、例えば周裕鍇氏が「（劉辰翁の評點は）詩を讀む過程で自らが感じ悟った獨り言であり、本義を理解したいという讀者の要求を滿足させることは考慮していない」[32]と述べるのも、飽くまでも劉辰翁の評點の一面に過ぎず、「情」の重視には、むしろ彼の文學批評の「尚意」的特徴を看取できると筆者は考えるのである。

そして、この極めて特徴的な評語は後世に物議を釀した。例えば、清の王琦は『李長吉歌詩彙解』で次のように述べる。

（劉辰翁）屢云、妙處不必可解。試問、作詩至不可解、妙在何處。觀古今才人嘆賞長吉諸詩、嘆賞其可解者乎、嘆賞其在理外者乎、抑嘆賞其不在理外者乎。予謂、須谿評語、疑誤後人正復不少。而自附于長吉之知己謬矣。宋潛溪嘗訾劉氏評詩、如醉翁寐語、終不能了了。可謂知言。（杜牧「李長吉歌詩敍」王琦注）[33]

（劉辰翁）屢ば云ふ、妙處必ずしも解すべからずと。試みに問ふ、詩を作りて解するべからざるに至れば、妙は何處に在りや。古今の才人の長吉の諸詩を嘆賞するを觀るに、其の解すべき者を嘆賞するか、其の理外に在る者を嘆賞するか、抑も其の理外に在らざる者を嘆賞するか。予謂へらく、須谿の評語、疑ふらくは後人を誤らしむること正に復た少なからざらん。而るに自ら長吉の知己に附するは謬りなり。宋潛溪（宋濂）嘗て劉氏の評詩を訾りていふ、醉翁の寐語の如し、終に了了ならしむる能はずと。知言と謂ふべし。

王琦は次のように批判する。劉辰翁はしばしば「その妙は必ずしも解さずともよい」と言うが、理解できなければ優れているも何もない。從來李賀詩を賞贊した文人達は、李賀詩の何を賞贊したというのか、と。そして、宋濂（一三一〇～八一）が劉評を「醉っぱらいの寢言だ」と批判した言葉[34]を引き、至言だとして贊同する。かかる王琦の强烈な批判は、時代による文學觀の變遷を窺う上で非常に興味深いものだが、同時に、かくも後世批判されるような劉辰翁の評點が、元代には確かに高く評價されたという事實にも、我々は注意せねばならない。劉辰翁の評點は、時代の文學觀を窺う上で非常に興味深い材料を我々に提供してくれるのである。

四　劉辰翁の詩の讀み方―作者との同化―

前節で劉辰翁の評點における「情」の重視について述べてきたが、劉辰翁のかかる文學觀が立脚するものとして、本節では彼の詩の讀み方の特徴について考察する。劉辰翁の詩の讀み方には、作者と自分を重ね合わせるようにして讀むという、いわば「作者との同化」とも言うべき態度が指摘できる。[35]このことについて、まず「蕭禹道詩序」[36]に見える杜詩の解釋を見てみたい。

嘗過友人、坐閒有杜詩一部。試開卷、第一句云「一縣蒲萄熟」。余問此有意否、其人大笑曰、「『一縣蒲萄熟』、卽一縣蒲萄熟耳。」余曰、「題爲『寓目』、下言『苜蓿』、政謂此二物皆北地所生、今滿眼見矣。」未喻。信手復閱一卷、指第一句「生平鶡冠子」。舊解曰「鶡冠子隱人也」。其人卽不復問、揖余坐。余因自念、此顏駟之嘆[37]也。故其下云「眼復幾時暗、耳從前月聾」。其厭世自悼如此、肯疊「鶡冠子」對「鹿皮翁」、徒道一「隱」字哉。今人未必知古人、而有輕古人之色、漫謂「尋常語卽尋常意」、試使宿留思之、未有不自見、而色已如此。

嘗て友人に過ぎるに、坐閒に杜詩一部有り。試みに卷を開けば、第一句に「一縣蒲萄熟す」と云ふ。余 此に意有るか否かを問へば、其の人大いに笑ひて曰く、「『一縣に蒲萄熟す』とは、卽ち一縣に蒲萄熟すのみ」と。余曰く、「題して『寓目』と爲し、下に『苜蓿』と言ふは、政に此の二物の皆な北地の生ずる所にして、今滿眼に見たるを謂ふなり」と。未だ喻らず。手に信せて復た一卷を閱し、第一句「生平鶡冠子たり」を指す。舊解に曰く「鶡冠子は隱人なり」と。其の人卽ち復た問はず、余に揖して坐せしむ。余 因りて自ら念ふに、此れ顏駟の嘆きなり。故より其の下に「眼は復た幾れの時か暗からん、耳は前月より聾なり」と云ふ。其の世を厭ひて自ら悼むこと此くの如ければ、肯へて「鶡冠子」に疊ねて「鹿皮翁」を對するは、徒だ一「隱」字を道ふのみか、と。今人未だ必ずしも古人を知らずして、古人を輕んずるの色あり、漫ろに「尋常の語は卽ち尋常の意なり」と謂ふも、試みに宿留して之れを思はしめば、未だ自ら見ざること有らず、而して色已むこと此くの如し。

これは、劉辰翁が友人と杜甫の詩を讀んだ時の話である。まず杜甫の「寓目」[38]詩の發句「一縣蒲萄熟」句について、座の人々は、「蒲萄が縣の至る所に熟している」という句の表面上の意味しか讀み取らぬのに對し、劉辰翁は、この「蒲萄」は次の句に見える「苜蓿」と共に北の地の植物であり、それが今杜甫の眼前に廣がっているのだと言う。ここには、書かれた言葉を讀み込むばかりではなく、作者がこのような言葉を吐き出した理由にまで深く踏み込み、詩を作る作者の心情を、自身のそれと重ね合わせて辿りながら詩を讀む態度が見出せる。また「耳聾」[39]詩の發句「生平（年）鶡冠子」句について、劉辰翁は「顏駟之嘆」を指摘する。顏駟は、前漢の文帝、景帝、武帝と三代の世に生きたが、文帝は文を好んだため、武を好んだ顏駟は用いられず、景帝は老年者を求めたため、若い顏駟は用いられず、武帝は若者を求めたため、老いた顏駟は用いられず、生涯不遇であった。「顏駟之嘆」とは自分の能力が世に必要とされないために用いられないことへの嘆きである。杜甫は朝廷への忠義心が非常に强かった。だが安祿山の亂という未曾有の國難に際して、杜甫は自らの能力が何の役にも立たないという現實を思い知らされたのである。第一句の評語に「世は方に武

を尚ぶを謂ふ」と言うのも、世の役に立てない杜甫の惨めな心情を端的に示す鋭い評語と言える。ここでも劉辰翁は、該句を詠んだ杜甫の心境に自身を重ねて作品中に深く入り込むことで、この句を發した作者の心中にある「顔駟之嘆」を感得したのである。これらの杜詩に關する議論を通じて、詩の中に深く入り込むと同時に、作者と自分を一體化させるようにして詩を讀み、解釋するという、劉辰翁の讀み方の特徴が指摘できよう。

そして、劉辰翁のこのような讀み方について考えるとき、彼の次の言葉は見逃せない。「韋蘇州集序」[40]において、劉辰翁は韋應物の詩を讀んだ時のことについて次のように述べている。

詩難評、觀詩亦復未易。憶與陳兪舜卿誦韋蘇州一二語、高處有山泉極品之味、共恨未見全集。偶郡有京遞、舜卿附急足、半月得之、報予共讀。數首輒意倦、再看復然、復取前選語視上下、殊不逮、因不敢復論。予後得此本、臥起與俱久而形神相入、欲就舜卿語、而故人不可得矣。

詩は評し難し、詩を觀るも亦た復た未だ易からず。憶ふ 陳兪舜卿と韋蘇州の一二語を誦するに、高處は山泉の極品の味有り、共に未だ全集を見ざるを恨む。偶ま郡に京遞有り、舜卿 急足に附し、半月して之れを得、予に報げて共に讀む。數首にして輒ち意倦み、再び看るも復た然り、復た前選の語を取りて上下を視れば、殊に逮ばず、因りて敢へて復た論ぜず。予 後に此の本を得、臥起與な俱にすること久しくして形神相入り、舜卿に就きて語らんと欲すれども、故人得べからざるなり。

ここで劉辰翁は、詩を讀むこともまた詩評と同様に難しいと述べる。彼はかつて韋應物の詩を（おそらく選集で）讀んだ時、そこに山中の極上の泉の水の味にも似た趣を感じたが、全集を手に入れて讀んでみるとすぐに飽きてしまった。だが後に、四六時中肌身離さず持ち歩いて讀み込むうちに、「形神相入」すなわち己の身も心もすっかり韋詩の中に入り込むほどに、深く讀むに至ったという。

ここに見える「形神相入」という言葉は、先の杜詩の例から指摘し得た劉辰翁の讀みの特徴、すなわち作者との同化について、彼自身の言葉で明確に述べた重要なものである。

そして、かかる劉辰翁の讀み方に關して、同時代の程鉅夫（一二四九～一三一八）が廬陵出身の若い詩人に與えた「嚴元德詩序」[41]において、模範とすべき地元の先達として劉辰翁に言及した際に、次のように述べるのは注目される。

會孟於古人之作、若生同時、居同鄉、學同道、仕同朝、其心情笑貌、依微俯仰、千態萬狀。言無不似、似無不極。其言曰、「吾之評詩、過於作者用意。」故會孟談詩、近世鮮能及之。

會孟 古人の作に於て、同時に生き、同鄉に居り、同道に學び、同朝に仕ふるが若く、其の心情笑貌、依微なる俯仰は、千態萬狀なり。言ひて似ざる無く、似たること極まらざる無し。其の言に曰く、「吾の詩を評するや、作者の意を用ゐるよりも過だし」と。故に會孟の詩を談ずるや、近世能く之れに及ぶもの鮮し。

ここには、劉辰翁が過去の文人の作品（詩）を讀む際には、まるで作者と同じ時代に生き、同じ土地に住み、同じ道に學び、同じ政權に仕えているかのように、その心情や表情、わずかな動作など、その言及は極めて的確であると述べられている。劉辰翁の詩の讀み方の特徴である「作者との同化」を見事に看取し得た言葉である。そして、このような讀み方こそが、劉辰翁の詩への評點が諸家よりも突出してい

る理由とされていることにも注意したい。この程鉅夫の言葉から、當時の數ある詩評の中でも、劉辰翁のこのような讀み方は非常に特徴的なものであったこと、そして、「作者との同化」という劉辰翁の讀詩態度は、劉辰翁の評點或いは文學批評において、極めて重要な位置を占めるものであったことがわかる。身も心も作者に重ねるようにして、或いは作者以上に深く、作品の中に入り込んで讀むからこそ、そこに詠み込まれた「情」を劉辰翁は深く汲み取るのである。[42] 劉辰翁の「情」の重視は、彼のこのような詩の讀み方に裏打ちされたものであった。

五　おわりに

以上、劉辰翁の評點について實例の分析を通して考察してきたが、これまで論じてきたように、「情」の重視は劉辰翁の評點において重要な要素であった。

元代の詩は、一般に、宋詩への反省から、唐詩の抒情性へと回歸したと言われ、やはり「情」が非常に重視されている。「情」の重視は、元詩を考える上で極めて重要なテーマである。例えば戴良（一三一七～八三）は次のように述べる。

唐詩主性情、故於風雅爲猶近。宋詩主議論、則其去風雅遠矣。然能得夫風雅之正聲、以一掃宋人之積弊、其惟我朝乎。（「皇元風雅序」[43]）

唐詩は性情を主とし、故に風雅に於て猶ほ近きと爲す。宋詩は議論を主とすれば、則ち其の風雅を去ること遠し。然るに能く夫の風雅の正聲を得、以て宋人の積弊を一掃するは、其れ惟だ我が朝なるのみかな。

また吳澄にも次のような發言がある。

詩以道性情之眞。十五國風有田夫閨婦之辭、而後世文士不能及者、何也。發乎自然而非造作也。（「譚晉明詩序」[44]）

詩は以て性情の眞なるを道ふなり。十五國風 田夫閨婦の辭有るも、而れども後世の文士の及ぶ能はざるは、何ぞや。自然より發して造作に非ざればなり。

特に吳澄の發言は、劉辰翁「曾季章家集序」（第二節參照）と非常に內容も近いものとして注目される。劉辰翁の評點は、程鉅夫が「劉會孟 古今の詩人の祕を盡く發きてより、江西の詩 之れが爲に一變せり」[45]と述べたように、出現當時において高く評價され、その影響も大きかった。彼の評點本は、主に彼の弟子や子供らの教育に用いられたものであり、劉辰翁自身には積極的にそれらを出版して世に廣めようという意思は無かったが、[46] それらは劉辰翁の沒後、弟子や子供らによって出版され、[47] 中國のみならず、やがては日本や朝鮮にも廣くもたらされることになる。元代の文學を考える上で、劉辰翁の評點が果たした役割は看過できないのである。そして、本稿で論じたように、その評點では「情」が非常に重視されていたことを踏まえると、彼の評點は、中國詩史において、宋詩から元詩への變遷の上で、元詩の根幹部分に關わる重要な役割を果たしていたと考えられる。從來の文學史、特に我が國のそれにおいて、あまり大きく取り上げられることの無かった劉辰翁であるが、彼の文學、特にその評點活動は、宋の後、新たな元詩の始まりを告げるものとして、文學史上特筆されるべきものであろう。

注

（1）劉辰翁の文集は一百卷あったが、明代に散佚した。現在は、清代に『永樂大典』等より輯められた四庫全書本『須溪集』十卷の他、豫章叢書本『須溪集』七卷、『須溪先生四景詩集』四卷、『須溪先生記鈔』八卷、さらに吳企明校注『須溪詞』三卷（上海古籍出版社、一九九八年）、段大林校訂『劉辰翁集』十五卷（江西人民出版社、一九八七年）等が行われる。本稿では四庫全書本を底本とし、適宜諸本を參照した。

（2）評點については高津孝「宋元評點考」（『鹿兒島大學法文學部紀要人文學科論集』三一號、一九九〇年）、孫琴安『中國評點文學史』（上海社會科學院出版社、一九九九年）、張伯偉「評點遡源」（齋藤希史譯、『中國文學報』第六三冊、京都大學、二〇〇一年十月）等を參照。

（3）『揭傒斯全集』（中國古典文學叢書、上海古籍出版社、一九八五年）文集卷三。

（4）『吳文正公集』（『元人文集珍本叢刊』、新文豐出版、一九八五年）卷十一。

（5）劉辰翁の「情」を重視する文學觀については、顧易生等『宋金元文學批評史』（中國文學批評通史之四、上海古籍出版社、一九九六年）上冊第二編第六章、焦印亭「尋繹劉辰翁文學思想中的〝情眞〟與〝自然〟理念」（『井岡山學院學報〔哲學社會科學〕』第三〇卷第五期、二〇〇九年五月）等にも指摘がある。

（6）例えば劉辰翁「陳宏叟詩序」（『須溪集』卷六）を參照。

（7）このことについて、例えば查洪德氏は「〝吟詠情性〟（或稱〝吟詠性情〟）是中國詩學中一個貫穿始終的基本命題，……在元代，這一命題使用頻率之高爲前代所未曾有」（『理學背景下的元代文論與詩文』〔中華文史新刊、中華書局、二〇〇五年〕第五章一一三頁）と述べる。

（8）『須溪集』卷六。

（9）『淮南子』脩務訓に「夫謌者樂之徵也、哭者悲之效也、憤於中則應於外、故在所以感」と。

（10）杜甫「解悶十二首」其七に「陶冶性靈存底物、新詩改罷自長吟」（『杜詩詳註』〔中華書局、一九七九年〕卷十七）と。

（11）なおこのことに關連して、文學において「自然」であることを高く評價する劉辰翁の文學觀について、吳翔明「崇尚〝自然〟—試論劉辰翁文學創作觀」（『井岡山學院學報〔哲學社會科學〕』第二七卷第五期、二〇〇六年五月）や前掲焦印亭「尋繹劉辰翁文學思想中的〝情眞〟與〝自然〟理念」等に指摘がある。

（12）『須溪集』卷六。

（13）『春秋左氏傳』襄公三一年に「然明謂子產曰、『毀鄉校何如。』子產曰、『何爲。夫人朝夕退而游焉、以議執政之善否。其所善者、吾則行之。其所惡者、吾則改之、是吾師也。若之何毀之。我聞忠善以損怨、不聞作威以防怨。豈不遽止。然猶防川。大決所犯、傷人必多、吾不克救也。不如小決使道、不如吾聞而藥之也』」と。

（14）『須溪集』卷六。

（15）原文は次の通り。「亘古今之不平者、無如天。人者有所不平、則求直於人、則求直於有位者、則求直於造物、能言故也。若天之視下也、其不平有甚於我。有甚於我而不能自言、故其極爲烈風、爲迅雷、爲孛、爲彗、爲虹、爲山崩石裂、水涌川竭、意皆其鬱積憤怒、亡所發泄、以至此也。退之謂『四時之推奪爲不平』。彼四時者、各一其所、而豈有不平者哉。」

（16）『養吾齋集』（文淵閣四庫全書）卷九。

（17）劉辰翁の李賀詩への評點は、南宋の吳正子の箋注との合刻本『吳正子箋注劉辰翁評點李長吉歌詩』（以下『評注李賀詩』と稱す）として傳存する。『評注李賀詩』は複數のテキストが傳わる。本稿では京都大學附屬圖書館所藏足利義政舊藏室町寫本、國立公文書館內閣文庫所藏林羅山舊藏江戸寫本、昌平坂學問所刊官板、劉辰翁評點九種書所收本、文淵閣四庫全書所收本（圈點は無い）を參照した。通常『評注李賀詩』は專ら官板が用いられる。官板は缺損が最も少ないという點では他本より優れ

るが、文字や圏點に改變が多い。本稿では官板を底本とし、諸本と校勘した上で用いた。なお室町寫本は京都大學電子圖書館貴重資料畫像として、web上で寫眞畫像が公開されている（「京都大學電子圖書館貴重資料畫像」[http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html]）。また、李賀詩への劉辰翁の評點については王次澄「劉辰翁評點李長吉歌詩析論」（張高評主編『宋代文學研究叢刊』第八期、麗文文化事業公司、二〇〇二年）、焦印亭「劉辰翁評批李賀詩探析」（『南昌高專學報』二〇〇八年第一期、二〇〇八年二月）等がある。

（18）『評注李賀詩』卷二。

（19）この詩には圏（○）と點「丶」という二種類の圏點が用いられている。高津孝「宋元評點考」は宋代の評點について「評點」と「標點」という二つの流れの存在を指摘した上で、「評點派と標點派は、その圏點法に於ても違いがあった」と指摘する。同論文によれば、卷首に圏點の凡例を載せる評點本も存在し、圏點法は流派や諸家によって違いがあり、必ずしも一樣ではなかったようである。劉辰翁についても、例えば李賀「還自會稽歌」（『評注李賀詩』卷一）の「野粉椒壁黄、濕螢滿梁殿」や「勉愛行二首、送小季之廬山」其二（『評注李賀詩』卷二）の「荒溝古水光如刀、庭南拱柳生蠐螬。江干幼客眞可念、郊原晩吹悲號號」等のように、圏と點に明確な使い分けが窺える（なお「勉愛行」について、室町寫本は「江干」二字の圏點を缺き、江戸寫本は「刀」「晩」兩字について、圏ではなく點に作る）。兩者の用法について、點は詩句の內容の優れた部分に用いられるのに對し、圏は表現としての新奇性に着目して用いられたのではないかと考えられる。圏が付された語のうち、諸本閒に圏點の異同が無い「野粉」「濕螢」「荒溝」「古水」「拱柳」「幼客」は、いずれも李賀以前には用例を見出し難い語であり、またいずれも限定語に當たる字に圏が付されているからである。かかる劉辰翁の圏點法については、詳しくは稿を改めて考察したい。

（20）張華『博物志』（指海）卷二に「蜥蜴、或名蜴蜒。以器養之、食以朱砂、體盡赤、所食滿七斤、治擣萬杵、點女人肢體、終身不滅。有房室事則滅、故號守宮」と。

（21）銅雀臺を詠う擬古樂府「追和何謝銅雀妓」（『評注李賀詩』卷三）の評語に「李賀が銅雀妓をテーマに詩を作ったら、死者の聲無き聲を詩に詠い込みそうなものであるが（以長吉賦銅雀妓、宜有墓中不能言者）」とあり、かかる李賀詩の特徴についても、劉辰翁は熟知していたと考えられる。

（22）『評注李賀詩』卷一。

（23）『舊唐書』卷一三七李賀傳參照。

（24）『孟子』離婁下に「王者之迹熄而詩亡、詩亡然後春秋作」と。

（25）『須溪集』卷六。

（26）『評注李賀詩』卷一。

（27）例えば清の王琦は「皆據一時所見者而言」（『李長吉歌詩彙解』（『李賀詩注』所收、中國文學名著、世界書局、一九七八年）卷一）と注し、計算されて配置された句ではなく、單に實景を挾んだのだとする。

（28）『評注李賀詩』卷三。

（29）『評注李賀詩』卷一。

（30）第三、四句の圏點を、官板は點に作るが、室町寫本が圏に作るのに從う。

（31）周裕鍇「「尙意」から「尙味」へ―宋代詩歌解釋學の重心の變遷に關する試論―」（山本範子譯、大阪市立大學中國學會『中國學志』隨號、二〇〇二年）、同氏『中國古代闡釋學研究』第六章第二節（學術創新叢書、上海人民出版社、二〇〇三年）を參照。なお周氏は劉辰翁の評點について「劉氏評詩從來不屑於對原文的字詞、章句逐一訓釋、甚至很少對詩歌的本意作出闡述、而往往只是三言兩語道出自己對詩歌的名章警句的總體印象或感受」（周氏前揭書第六章第二節二九八頁）と述べ、その最

たる例としてこの「不必可解」を擧げる。

(32) 周裕鍇氏前掲論文。

(33) 『李長吉歌詩彙解』卷首。

(34) 語は宋濂「杜詩擧隅序」(『杜詩詳註』附編) に見える。

(35) なお、類似する讀詩法として、宋代に流行した、讀者が作者と同様の體驗を通してその作品を理解するという讀み方 (周裕鍇氏前掲書第五章第六節を參照) があるが、これは言わば體驗の共有による詩の解釋と言えるものであり、それに對して、本節で論じる劉辰翁の「作者との同化」は、作者と自身とを重ね合わせ、作者の創作過程やその時の心理、或いは作者がその詩句を發した理由を想像するという、言わば追體驗による解釋であり、兩者はやや異なるものと筆者は考える。

(36) 『須溪集』卷六。

(37) 『太平御覽』卷三八三人事部壽老所引『漢武故事』に「上嘗輦、至郎署、見一老髭鬚皓白、衣服不完。上問曰、『公何時爲郎。何其老矣。』對曰、『臣姓顏名駟、江都人也。文帝時爲郎。』上問曰、『何不遇也。』駟曰、『文帝好文、臣好武。景帝好老、臣又少。陛下好少、臣已老。是以三世不遇。』上感其言、拜爲會稽都尉」と。

(38) 『集千家註批點杜工部詩集』(天理圖書館善本叢書、八木書店、一九八一年。以下『評注杜詩』と稱す) 卷五。乾元二年 (七五九年)、秦州での作。本文及び劉辰翁評點は以下の通り。「一縣蒲萄熟、秋山苜蓿多。【二物皆遠致、今溢於中國。寓目喟然至「羌女」「胡兒」者矣。】關雲常帶雨、塞水不成河。羌女輕烽燧、胡兒制駱駝。自傷遲暮眼、喪亂飽經過。」なお『杜詩叢刊』所收嘉靖刊本は發句の圈點を缺く。

(39) 『評注杜詩』卷十七。大曆二年 (七六七)、夔州での作。本文及び劉辰翁評點は以下の通り。「生年鶡冠子、【謂世方尚武。】歎世鹿皮翁。眼復幾時暗、耳從前月聾。【意其怨。】猿鳴秋淚缺、雀噪晚愁空。黃落驚山樹、呼兒問朔風。【不聞風聲、惟見落葉。】」尾批の「惟」を底本は「推」に作るが嘉靖刊本に從い改める。

(40) 『永樂大典』卷九〇六所引。

(41) 『程雪樓文集』(元代珍本文集彙刊、國立中央圖書館、一九七〇年) 卷十五。

(42) なお、この「作者との同化」については、『孟子』の「以意逆志」(萬章上) や所謂「知人論世」(萬章下) の影響も考えなければならないが、このことについては今後の課題としたい。

(43) 『九靈山房集』(四部叢刊初編) 卷二九。なお楊鎌氏に據れば、この『皇元風雅』は傅習、孫存吾編のそれではなく、元末の丁鶴年によって編まれたものであるという (同氏『元詩史』(人民文學出版社、二〇〇三年) 六四頁注)。

(44) 『吳文正公集』卷十。

(45) 程鉅夫「嚴元德詩序」に「自劉會孟盡發古今詩人之祕、江西詩爲之一變」と。

(46) 高津氏前掲論文、拙稿「劉辰翁の評點活動と元朝初期の文學」(九州大學中國文學會『中國文學論集』第三七號、二〇〇八年) を參照。

(47) 劉辰翁の評點本の出版には、彼が活動した廬陵が當時福建と竝んで出版の盛んな土地であったことも關係していよう。廬陵における出版の隆盛については土肥克己「宋元時代の建陽と廬陵における分集本出版」(東方學會『東方學』第一〇九輯、二〇〇五年一月) 等を參照。

〔附記〕

本稿は、第六一回日本中國學會大會 (二〇〇九年十月十二日、於文教大學) における口頭發表の一部をもとにしたものである。當日司會をお引き受け頂いた鹿兒島大學の高津孝先生を始め、ご意見を賜った諸先生方にこの場を借りて心より御禮申し上げます。